

# 新妻昭夫先生を偲ぶ会式辞 「スピリチュアルなナチュラルリスト」

川島 堅二

恵泉で働く同僚を私は努めて「～さん」付けで呼ぶようにしている。それでも「先生」付けで呼び返されることが多いのだが、研究室も隣り同士である新妻さんは、私のことを「川島さん」と呼びかけてくれる数少ない同僚の一人だった。このような公の場では「新妻先生」とお呼びするのが礼儀なのかもしれないが、あえて生前に呼び合っていたままに「新妻さん」とお呼びする失礼をお許しいただきたい。

新妻さんを「偲ぶ会」における私の責任は牧師という聖職者の資格を持つ者として、適切な聖書と讃美歌をえらぶこと、そして、キリスト教的な式辞を簡潔に述べる。しかし、生前の新妻さんを思い浮かべれば浮かべるほど、新妻さんに喜んでもらえそうな聖書の言葉や讃美歌が浮かんでこない。新妻さんはある著書の中で、「演歌で涙した経験はあっても、讃美歌で涙した経験はない」とはっきり書いておられる。結局、メロディーの歌い易さという理由だけで先程の讃美歌（『讃美歌21』111番）を選択した。ただこの後に一緒に歌う讃美歌は少し違うのだが、この点については最後に触れる。聖書の箇所も、今日のような偲ぶ会ではよく読まれるオーソドックスな箇所、すなわち先に天に召された多くの信仰の先輩たちの足跡を想起して勇気を出そうと呼び掛けるヘブライ人への手紙(12章1～2節)から選ぶことになった。

式辞としては、新妻さんが書き遺されたものの中から、敢えて新妻さんの「信仰」と呼べるものをご紹介します。責を果したい。

それは3年前の2007年に、恵泉の人間環境学科の同僚であった古谷さんらと共に共訳で出された現代進化生物学の代表者の一人、スティーブン・グールドの著作『神と科学は共存できるか?』に寄せた一文である。それは翻訳書に添えられた解説文のような位置づけだが、50ページ近い分量のもので、解説文の域を超えた、新妻さん自身の信仰告白的内容を含む大変興味深いもので

ある。私のようなキリスト教徒には深い慰めとなる次のような言葉を残しておられる。

「私は北海道という外地で生れたせい、日本の伝統宗教よりもキリスト教に親しみを感じながら育った。いまはキリスト教系の女子大という職場にいて、掛け値なしに『善良なキリスト教徒』の同僚や学生を何人かは知っている」。さらに続けて「若い時から世界各地を放浪する癖があり、さまざまな宗教を信仰する人々と出会ってきた」と述べて、北アフリカ、アフガニスタン、インドネシア等で宗教的な日常生活を送っている人々との心温まる経験を紹介している。

そして、現代進化生物学を代表する三人の学者、すなわち行動生態学者のドーキンス、古生物学者のゲールド、そして社会生物学者のウィルソンを自分はこれまで好んで読んできたけれども、その理由は「自然界の驚異に魅了される喜び」「センス・オブ・ワンダー」「スピリチュアルな歓喜」を、読書することで得たいがためだったと言いきっておられる。

そういう新妻さんを「スピリチュアルなナチュラルリスト」と呼んだら、おそらく新妻さんは「そんな大仰なものではない」と否定されるだろう。しかし、「スピリチュアルなものを決して排除しないナチュラルリスト、自然学者」ということなら受け入れてくださる気がする。

最初に、「演歌で涙しても讃美歌で涙したことはない」という新妻さんのことばを紹介した。しかし、そういう新妻さんが「こんな讃美歌もあったのか」と感心され、心を動かされた讃美歌、それがこの後、一緒に歌う讃美歌(『讃美歌21』575番)です。これは二つ目の讃美歌を選ぶ際に、本学のオルガニストである関本恵美子さんが、以前、新妻さんがそのように言われていたと教えてくださったものです。この歌詞を味わいながら「自然界の驚異に魅了される喜び」「センス・オブ・ワンダー」「スピリチュアルな歓喜」という新妻さんの「信仰」をご一緒に偲びたいと思います。

『讚美歌21』575番

1. 球根の中には 花が秘められ  
さなぎの中から いのちはばたく。  
寒い冬の中 春はめざめる。  
その日、その時を ただ神が知る。
2. 沈黙はやがて 歌に変えられ  
深い闇の中 夜明け近づく。  
過ぎ去った時が 未来を拓く。  
その日、その時を ただ神が知る。
3. いのちの終わりは いのちの始め。  
おそれは信仰に 死は復活に  
ついに変えられる 永遠の朝。  
その日、その時を ただ神が知る。



## 新妻昭夫先生を偲ぶ会次第

司会：川戸れい子（人間社会学部学部長）

奏楽：関本恵美子（キリスト教音楽主任）

前奏

讃美歌 讃美歌 21 1 1 1 番

聖書 ヘブライ人への手紙 1 2 章 1 ～ 2 節

宗教委員長

斉藤小百合

式辞

人間社会学部教授 川島 堅二

祈禱

//

新妻先生略歴・業績紹介

人間社会学部教授 大橋 正明

新妻先生の思い出

恵泉女学園大学長 木村 利人

人間環境学科主任

早苗 澤登

人間環境学科 2 期生

後藤 由美

人間環境学科 4 年生

吉岡 房枝

讃美歌

讃美歌 21 5 7 5 番

後奏

山下 恵子

挨拶

献花

## 新妻昭夫先生を偲ぶ会

2010 年 12 月 9 日（木） 17:00～17:50

恵泉女学園大学 チャペル

<故 新妻昭夫 略歴>

1949年5月 札幌に生まれる。北大ヒグマ研究グループ出身。1987年京都大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。専攻は動物学、博物学史など。

探検ナチュラリスト。街から森、無人島から海外、そして前世紀の博物学の書物まで、あらゆることを探検し、未知との出会いを追い求める。

著書に『種の起源をもとめて』（第51回毎日出版文化賞受賞、朝日新聞社、1997）『ダーウインのミミズの研究』（福音館書店、2000）など。訳書にA・R・ウォーレス『マレー諸島』（ちくま学芸文庫、1993）、同『熱帯の自然』（共訳、平河出版社、1987）、A・C・ブラックマン『ダーウインに消された男』（共訳、朝日新聞社、1984）、S・J・グールド『フラミンゴの微笑』上下（早川書房、1989）、同『神と科学は共存できるか？』（共訳、日経B P社、2007）、E・マイア『進化論と生物哲学』（共訳、東京化学同人、1994）、G・ホワイト『セルボーンの博物誌』（小学館地球人ライブラリー、1997）、R・マッシュ『新版 恐竜の飼いかた教えます』（共訳、平凡社、2009）など。

1988年恵泉女学園大学助教授、1999年より同大学教授、2007年より恵泉女学園大学園芸文化研究所所長

## 聖書

へブライ人への手紙12章1～2節

1 こういうわけで、わたしはたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、2 信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら、このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をいとわないうで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。